ー和歌山県ー

ヒジキの復活作戦

新庄漁業協同組合女性部
坂 本 光 枝

1．地域と漁業の状況

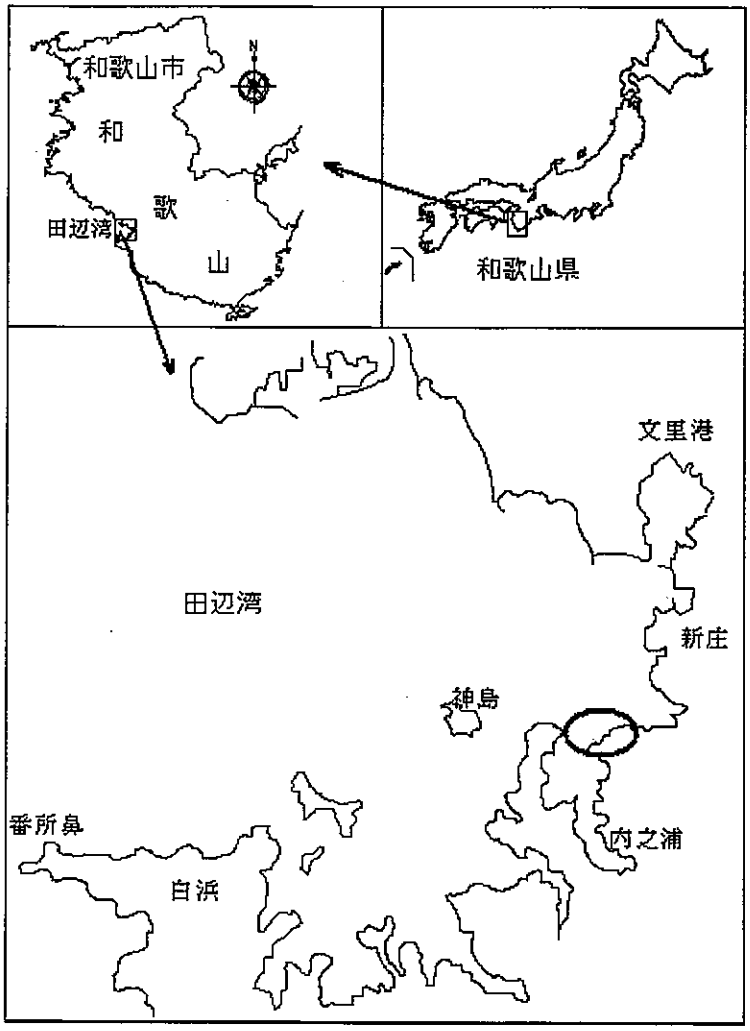

図１　田辺市新庄地区の位置と実践場所

私達の新庄漁協は、和歌山市と串本町潮岬のほぼ真ん中に位置する田辺湾の湾奥（図１）にある。2009年５月にはマッコウクジラが迷い込み翌６月に奇跡の生還を果たして話題になった場所であり、また、近くにある新庄総合公園では2011年５月22日、天皇陛下をお迎えして、全国植樹祭が予定されている。

2．漁業の概要

新庄漁業協同組合は正組合員74名、准組合員290名で構成され、漁業は主に採介藻、一本釣り、刺し網漁業を営んでいる。また、最近では、漁船を使った遊覧観光「田辺湾クルージング」も行っている。

組合自営事業としては釣り筏の経営やヒオウギガイ、カキの養殖・販売を行っている。

3．女性部組織の概況

私達の女性部は昭和31年に設立され、発足当初は、80名近い部員がいたと聞いているが、現在は、29名で運営している。役員は部長１名、副部長２名、会計１名（任期２年）。班長は７名で１年毎、の任期となっており、出来るだけ多くの者が役職を経験するように心がけている。

写真１　田辺市農林水産業まつりでの販売風景

４．研究・実践活動の動機

女性部のある田辺市では毎年「農林水産業まつり」が開催され、毎回好評を博している。このまつりが始まった当時から私達にも参加要請があり、何を出展するかを部員間で検討したところ、ヒジキが最も適しているという意見で一致した。当時、多くの組合員の家庭では自家消費用と贈答用にヒジキを保管しており、これを機にヒジキの宣伝、普及活動を始めることとなった。

先ず、参加に向けて組合員の家庭にヒジキの寄付を募った結果、話を聞いた部員外の多くの家庭からも賛同が得られ、「農林水産業まつり」で販売する運びとなった。その後、回を重ねるたびに食べ方を工夫したり、レシピを作ったりして宣伝を続け、来場者から「あんた達のヒジキはおいしい。」と言ってもらえるようになったのである。

ところが、肝心のヒジキは、新庄の地磯から既に姿を消してしまっており、現在は隣接する和歌山南漁協の白浜地区で刈り取らせてもらっている状態である。入漁料を支払っているとはいえ、他所の磯で遠慮しながら刈り取らせてもらうのは肩身が狭く、心寂しい思いをしているのが本音である。さらに、豊富にあった白浜地区でも目に見えて減少してきたため、危機感を募らせていた。

かつては新庄の地磯にもヒジキが豊富にあり、家族総出で 12 時の解禁の合図を待ったもので、お弁当を持ち、家族が心合わせてする年中行事のひとつだったのである。それが 20 年位前から地元の磯では見られなくなり、まつり等でのヒジキの人気があがるにつれ、新庄の地磯で復活させたいと考えるようになってきた。幸い最近では、赤潮の発生件数が大幅に減少したり、姿を消していた天然のカキやヒオウギガイが漁獲されるようになったりして、海が蘇ってきたように感じられてきた。ヒジキも昔のように自分達の磯で復活させることができるのではと思うようになり、和歌山県農林水産総合技術センター水産試験場と相談し、復活作戦に取り組むこととした。

写真２　移植により復活したヒジキ場（１㎡）

5．研究・実践活動状況及び成果

（1）ヒジキ復活に向けた移植実験

新庄の地磯でヒジキを復活させるためには、そもそも新庄でヒジキが生育できるのか、生育できるとすればどのような条件の場所が最も適しているのかということを明らかにする必要がある。その点について水産試験場に調査を依頼し、明らかになった条件に沿ってヒジキ場の造成を行うこととした。実験は、2005年5月から開始された。田辺湾の湾口部に成育していたヒジキの母藻を仮根ごと新庄の幾つかの磯に1㎡ずつ移植した。その後観察を続け、「畠の鼻（はたのはな）」という磯で十分に成育できることが明らかとなった（写真2）。また、その年の7月には母藻の消失した仮根部や周辺の岩盤上に多数の幼体を確認したのである。

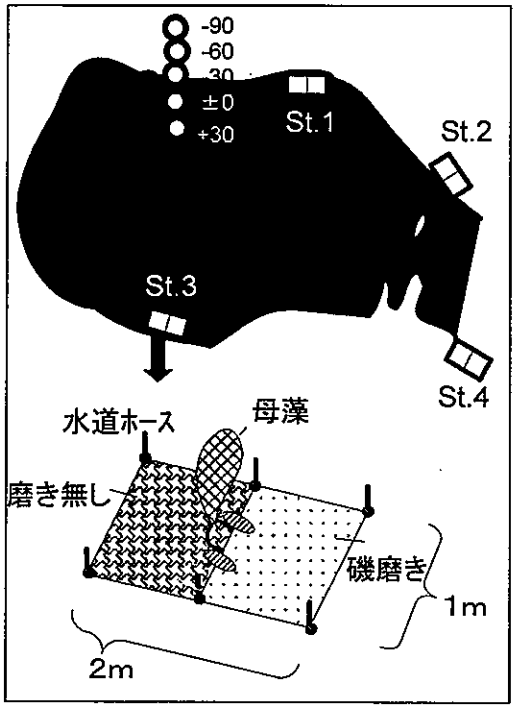

図2　畠の鼻での試験区

この結果を受けて、翌年5月から「畠の鼻」で継続して実験を続けることにした。今回の目的は、生育にはどのような条件の場所が適しているかということである。そのため水産試験場とともに「畠の鼻」で波当たりの異なる4ヶ所に実験区（図2）を設定し、白浜で採取した母藻を1kgずつセットした。この時は、母藻採取場所にダメージを与えないように仮根を残して刈り取り、実験区への母藻のセットには網袋を使った。また、同時に岩盤をきれいに磨く区と磨かない区を隣接させ1試験区とした。この試験区の設定には私達も参加し、一緒に磯磨きを行ったのである。以前にも、アオサ増殖の為に磯磨きをしたことがあり、この時の経験と試験場の意見を取り入れながら女性部で磯磨きの道具を取り揃えた。この試験により①波当たりの強い場所、②磯磨きをすること、③水深は干上がる場所とすることなどの条件が明らかとなり、いよいよヒジキ場復活に向けた取り組みが開始される運びとなったのである。

（2）ヒジキ場造成

2007年5月には、これまでの実験により明らかになった条件に沿って、干潮時に干上がるところを幅1m、長さ 100m にわたって磯をみがき、食害するウニを駆除した。また、種をまくために、成熟したヒジキの母藻を接着剤で岩にはりつけたり、網袋に入れて固定したりした（写真3、4）。

写真３　部員総出の磯磨き

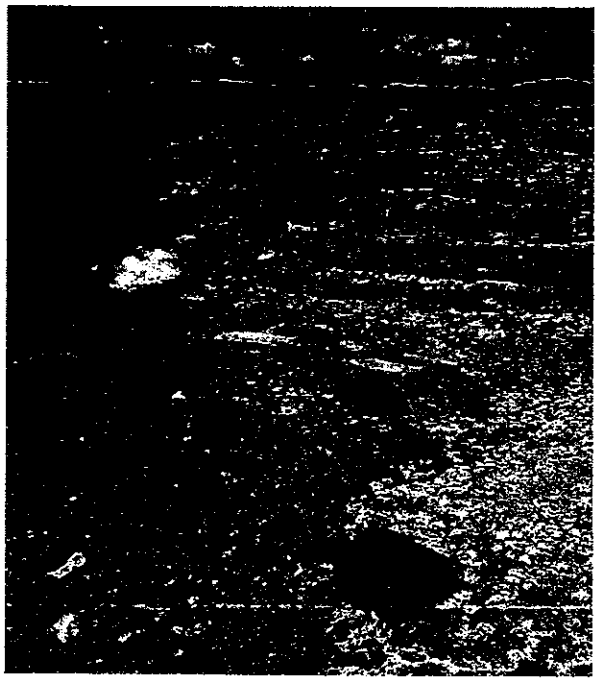

写真４　母藻の設置状況

2008年５月８日には待望の初水揚げを行い、約100kg収穫することができた。やはり波当たりの強い所の方が生育も良く、株も多く生えていた。（図３、４）。また、土地の人によると、この場所（畠の鼻）の隣の島には以前ヒジキがたくさん生えていたとの情報を耳にし、今回の取り組みで自信を持った私達は、昔生えていた所に復活させたいと思い、この年は近くの黒崎（くろさき）と呼ばれる磯に種まきを実施した。しかしながら、2009年の黒崎での着床は思わしくなく、また、昨年は成績が良かった畠の鼻のヒジキも生育が悪かったため、来年に備えて収穫は取りやめにした。そして、新たな場所として「四ッ目（よつめ）」という場所を選び、５月14日に造成を実施した。この場所は土地の古老の話では、良質のヒジキが生える所だったとのことである。その後５月26日には「畠の鼻」のヒジキがもっと広がるよう、部員総出で丁寧に根元付近の磯磨きを実施した。

2010年５月「畠の鼻」ではヒジキがとても良好に生育していたため、これまで

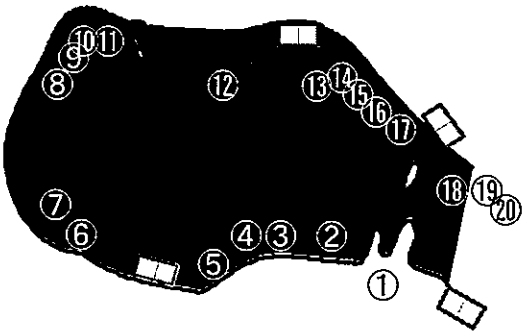

図３ 磯磨きを行った畠の鼻

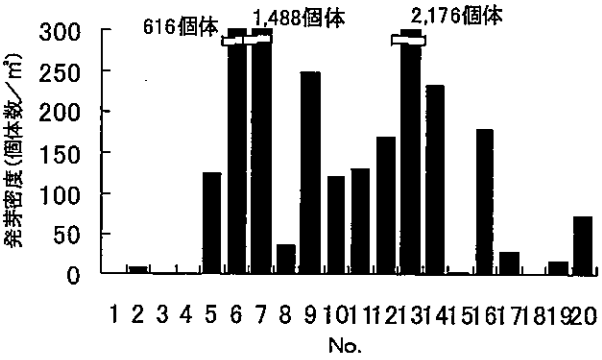

図4　畠の鼻での発芽状況

は白浜から持ってきていた母藻を「畠の鼻」で育ったヒジキに替え、再び「四ッ目」に植えることにした。昨年と異なって、今年はたくさんみられるヒジキの株に、私達の磯を磨く手にも力が入った。さらに、畠の鼻では母藻としてヒジキを刈り取ったが、まだたくさん生育していたので、数名の部員で収穫することにした。収穫量はなんと 350kg になり、こんなにたくさん刈れるのだったら、皆に呼びかけて、多くの部員に収穫の喜びを味わって欲しかったなと後悔するほどであった（写真５）。

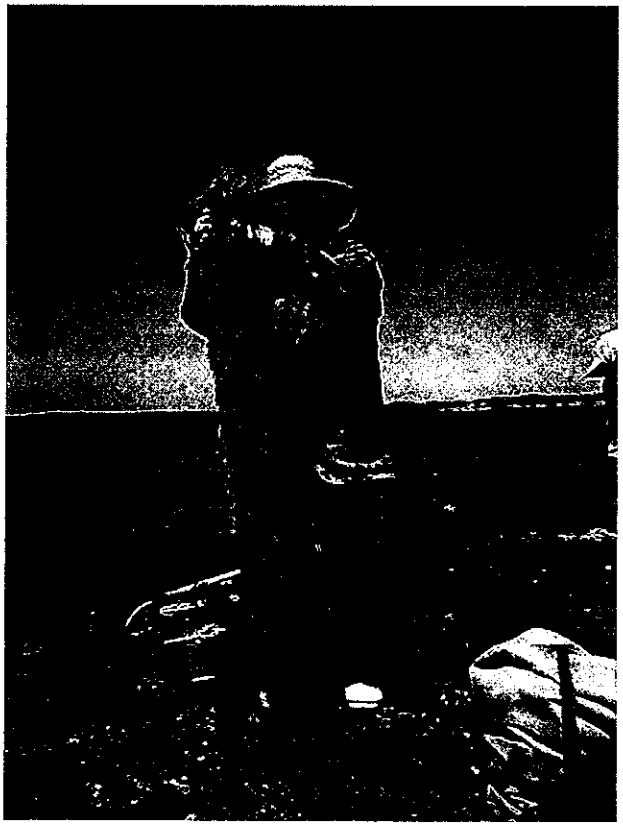

写真５　復活したヒジキの収穫

昨年特に丁寧に磨いたところは良く付いており、やはり波が荒い所の方が良く伸びている様にも思われた。これまでの活動が少しずつ実を結んできており、今後このような場所を中心にヒジキ場を拡大してきたいと考えている。

６．　波及効果

女性部の活動費は部員会費と漁業組合からの助成によりまかなっている。今回、新たな活動としてヒジキの繁殖保護を行うことになったので、これにかかる経費は、2007 年度には組合からの助成金の半分を充て予算を捻出した。また、2008 年には初水揚げできたことから、活動費が自分達で稼げるようになり、従来の女性部の活動費にあてることができるようになった事から、少しではあるが活動にゆとりが生まれてきた。そして以上のような成果から漁業組合からの助成金は全てヒジキの繁殖保護活動費に充てようと女性部総会では満場一致で決定したのである。

「四ッ目」の成績が良かったら、次は「アマコ」へ、「神島のおやまの鼻」へと夢は次々に広がっている。

７．今後の課題や計画と問題点

洗浄機や船の操作等、女性部だけではできないけれど、組合から「ヒジキは女性部で」と任されている以上、漁協青年部等関係者の協力を仰ぎながら、皆でヒジキ刈りが出来る日を楽しみに励んでいきたいと考えている。